

嫌われ魔術師様の
敏腕婚活係

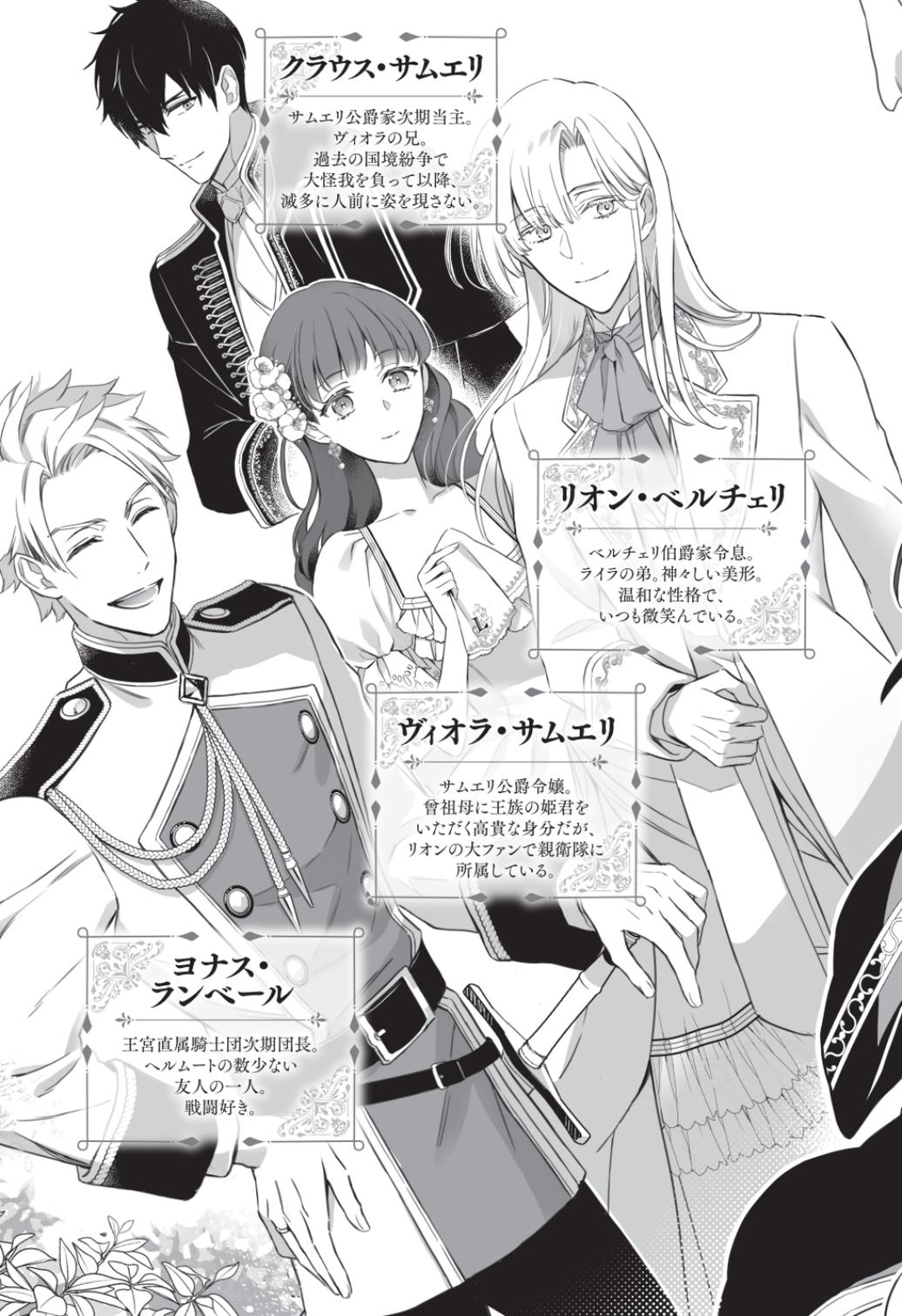
Characters

ヘルムート・マクシリティ

マクシリティ侯爵の庶子。
宮廷魔術師団長。
当代一の魔力量を誇る天才魔術師。
魔法騎士として戦うこともあるため、
剣の腕も立つ。
温かい家庭に憧れて婚活に
励んでいるが連敗中。

ライラ・ベルチェリ

ベルチェリ伯爵家令嬢。
幼なじみの宮廷魔術師団長、
ヘルムートの婚活を手伝うことになる。
実家の商会経営に携わっており、
コミュ力が高い。



クラウド・サムエリ

サムエリ公爵家次期当主。
ヴィオラの兄。
過去の国境紛争で
大怪我を負って以降、
滅多に人前に姿を現さない。

リオン・ベルチェリ

ベルチェリ伯爵家令息。
ライラの弟。神々しい美形。
温和な性格で、
いつも微笑んでいる。

ヴィオラ・サムエリ

サムエリ公爵令嬢。
曾祖母に王族の姫君を
いただく高貴な身分だが、
リオンの大ファンで親衛隊に
所属している。

ヨナス・ ランベール

王宮直属騎士団次期団長。
ヘルムートの数少ない
友人の一人。
戦闘好き。



Contents



プロローグ	～根暗な宮廷魔術師団長～	006
一	ライラと塔の魔術師	032
二	婚活を始めよう	064
三	魔獣討伐と婚活	103
四	婚活戦線異状なし?	130
五	『紳士の求愛作法』第五章百十二ページ目	187
六	決闘	213
七	ヘルムート様のダンス	246
八	夢と憧れの集大成	270

番外編 クラウス・サムエリの新しい家族 292

番外編 アイドルと下僕たち 307

「みんな、みんな滅びてしまえばよいのだ……」

ウウウ、と呻きながら、宮廷魔術師団長であるヘルムート様が先ほど届いたばかりの手紙をぐしゃりと握りつぶした。

ぼさぼさの長い黒髪の間から、寝不足で血走った琥珀色の瞳が覗く。血色の悪い顔色と相まって、まるで幽鬼のようだ。こんなんだから、ヘルムート様宛の書類を誰も届けたがらないんだろうな、とわたしは思った。

本来なら、一介の事務官であるわたしが、いかに秘密保持魔法がかけられているとはいえ、軍事機密書類をホイホイ預かれるはずはないのだ。

だが、ヘルムート様宛の書類は、何故かいつもわたしに回ってくる。

文句を言うと、「だってヘルムート様だよ、やだよ頼むよライラ」と拝まれるのだ。

魔術師は自他ともに認める変人ぞろいだ、その中でもヘルムート様の奇行は飛びぬけている。

史上最年少で宮廷魔術師団長に任命されたヘルムート様は、まごうことなき天才なのだが、才能と引き換えに常識を失ってしまった類いの人間だ。非常識さでは他の追隨を許さない塔の魔術師たちでさえ、関わりを避けている節がある。

「呪ってやる。崇ってやる。この裏切り者、卑怯者めえええええッ！」

怨念のこもった咆哮とともに、ヘルムート様が握りつぶした手紙に、ポツと火が付いた。

さすがヘルムート様。詠唱なしで発火とか、魔力が有り余ってるんだろなあ。

わたしも一応、魔術師団に所属してはいるものの、ヘルムート様の魔力とは比べるべくもない。

まあ、そもそもわたしは事務官だけど。

「あの、ヘルムート様。ニブル領の魔獣討伐行程表と兵站計画書も机に置いておきますので、燃やさないでくださいね」

わたしは心配して言った。ヘルムート様は机に突っ伏したまま、握りつぶした手紙を完全に灰にしてしまっている。まだまだ燃やし足りない！ とか叫びだして部屋の中のものを見境なく燃やされては困るのだ。

「そのお手紙、ランベール伯爵家のヨナス様からですよね？」

わたしの言葉に、ヘルムート様の肩がぴくりと動いた。

「……なぜ知っている」

「いやだって、宮廷中で噂になってますよ。おめでたい話じゃないですか。ヨナス様が長年の片思いが報われてついにめでたく婚約「うあああああああ！」

わたしの言葉をさえぎってヘルムート様が奇声をあげた。

「その呪われた単語を口にするなッ！」

呪われ……、いや、婚約って単語のどこが。

「まさか、まさかヨナスに先を越されるとは……」

うおおお、と髪をかきむしり、苦悩するヘルムート様にわたしは呆れて言った。

「なんでそんな風に思われたんです？ ヨナス様、子どもからお年寄りにまで大人気ですよ。先の

魔獣討伐でも活躍されましたし」

ヨナス様は国境紛争で名をあげた騎士だ。武の名門ランベール伯爵家の出身であり、その勇猛さや誠実な人柄は王都中に知れ渡っている。

しかし、

「あいつが人気なのは老人と子どもにだけだっ！」

がぼつと顔を上げ、ヘルムート様が吠えるように言った。

「給与や褒賞のほとんどを教会や孤児院に寄付する聖人だからなヤツは！ そりゃあ人気も出るだろうよ、老人と子ども限定で！ だが適齢期の女性には人気がない！ 何故ならば女性は、給与のほとんどを寄付してしまうような聖人を、尊敬はしても伴侶には選ばんからだ！」

……たしかに。ひどい言われようだけど当たってる。

宮廷でも、ヨナス様の善行はたびたび話題になるし、素晴らしいお方よね、という評価は揺らぐことがないのだけど、じゃあヨナス様と結婚したいかと問われたら、それはまた別の話になる。

「その点、私はヨナスのような善行など一切しない！」

ヘルムート様が胸を張って言った。

いやそれ、胸張って言うことでは……。

「私はもらった金はぜんぶ貯め込んでいるぞ！ 王都の一等地に城だつて建てられる！ なのに何故だ！」

なぜ私は結婚できない!? と血走った目で問われ、わたしはつい、本当のことを言ってしまった。

「やっぱり性格……」

うあああああああ！ とヘルムート様の絶叫が魔術師の塔に響き渡った。

あーもう、困った。

行程表と計画書の承認をもらわなきゃならないのに、この分だと午前中は無理っばいなあ……。わたしは荒ぶるヘルムート様を見ながら、そつとため息をついたのだった。

ヘルムート様はマクシリテイ侯爵家の次男であり、わたしの幼なじみだ。

マクシリテイ侯爵家に引き取られるまで、ヘルムート様は平民街に住んでいた。正確に言うならば、王都一の規模を誇る娼館に。

売れっ子の息子として生まれたヘルムート様は、王都の学院に上がる年齢になるまで、娼館で育てられた。出産時に母親が亡くなったため、娼館は父親とおぼしきマクシリテイ侯爵家のご子息にヘルムート様の保護を求めたのだが、当時マクシリテイ侯爵家当主であったヘルムート様の祖父が、娼婦の生んだ子どもを引き取ることを頑として拒んだのだ。

しかしその後、魔力が発現したヘルムート様は教会の鑑定を受け、当代一と言われるほどの魔力を保有していることが認められた。それにより、ようやくヘルムート様は侯爵家に引き取られることになったのだ。

恐らくヘルムート様の祖父は、魔力を持たない平民女性が侯爵家の血を継ぐ子どもを産むことなど不可能とっていたのだろう。実際、ヘルムート様のお母様は出産時に亡くなってしまったわけだし。

魔力耐性の問題から、ヘルムート様の祖父の考えも、あながち間違いとは言えない。

基本的に魔力を持たない平民は、魔力を持つ貴族の子どもを産むことはできないのだ。魔力を多く保有する貴族は、体質的に魔力耐性が高いため、魔力のある子どもを妊娠しても問題なく出産できる。だが、もともと魔力保有量の少ない、もしくはまったく魔力を持たない平民は、魔力耐性が低いいため、貴族の子どもを妊娠しても、出産に母体が耐えられないのだ。

しかし、それにしてもひどい話だ。ヘルムート様がお生まれになった時点で家に迎え入れるのが貴族として取るべき対応だが、マクシリテイ家は教会から圧力をかけられるまで、ヘルムート様を引き取るのを拒否し続けたのだ。恐らくはヘルムート様の祖父の意向を受けてのことだろうが、すでに侯爵家当主となっていたヘルムート様のお父様まで、唯々諾々とそれに従っていたのだから。

学院に入学させてくれただけ自分は恵まれている、とヘルムート様本人はあまり気にした様子を見せないけれど、本来なら許されることではない。

そんな生い立ちのヘルムート様とわたしがなぜ幼なじみなのかというと、ヘルムート様の育った娼館の近くに、わたしの一族が経営するベルチェリ商会の事務所があったからだ。

わたしと弟のリオンは、よく父に連れられて事務所を訪れたが、子どもに商売の話など退屈なだけだ。わたしと弟は父の商談が終わるまで、周辺の歓楽街をぶらついて過ごした。護衛付きだったし、歓楽街とはいえ昼間の治安はそこそこ良かったので、子どもだけでぶらぶらしていても、特に危険な目に遭うようなこともなかった。

そこで、わたしと弟はヘルムート様——当時は様付けなどせず、ヘルムートと呼び捨てにしていた——と出会ったのだ。

いや、出会ったというより、こちらが一方的にヘルムート様を見ていたといったほうが正しい。

その時ヘルムート様は、歓楽街を南北に縦断する大通りを一人で歩いていた。大通りは貴族街の端から歓楽街を抜け、教会や役所、警備隊の詰め所などのある官庁街まで続いているので、たぶんその時のヘルムート様は、娼館から教会へ向かう途中だったのだろう。ヘルムート様は昔から向学心にあふれていたが、娼館ではろくに読み書きも教えてもらえなかったらしく、王都の孤児たちと一緒に教会で学ぶことが、唯一の学習機会だったようだ。

ヘルムート様以外にも大通りを歩く子どもはいたが、家族が側にいるか、わたしとリオンのように護衛付きかで、ヘルムート様のように子ども一人で歓楽街をふらふらしている姿は珍しかった。

今にして思えば、娼館もヘルムート様の存在を持て余していたのだろう。娼館はマクシリティ侯爵家にヘルムート様を引き渡し、金を搾り取ろうとしたのに、侯爵家はその血縁関係すら認めようとはしなかったのだ。かといって、ヘルムート様を男娼として仕込むこともできない。ヘルムート様の魔力が発現すれば男娼として扱うわけにはいかず、かけた手間は無駄になってしまふからだ。

周囲へ与える影響から、魔力が発現した人間は、必ず国に登録を求められ、行動も制限される。この制度はある意味、魔力耐性値の低い人間を守るためのものだが、そのせいで娼館側には、ヘルムート様を育てるといふ選択肢が端からなかった。そうした事情から、虐待とまではいかないが、ヘルムート様は娼館で、ほぼ放置に近い扱いを受けていたようだ。

そのせいで子どもの頃のヘルムート様は、いつも一人だった。

わたしと弟のリオンは、一人でいるヘルムート様に目を引かれ、声をかけた。

父は恐らく、ヘルムート様の事情を承知していたのだろう。わたしとリオンがヘルムート様と親しく言葉を交わすようになって、それを止めることはしなかった。さすがに、父がその時すでに

ヘルムート様の才能を見抜いていたとは思わないが、なにがしかの価値は認めていたのかもしれない。

それにヘルムート様は、とても可愛かった。売れっ子の息子だけあり、たいそう整った見目をしていた。初めて見た時は、まるでお人形のようなだと思っただけのものだ。

その容姿も相まって、ヘルムート様はとても目立っていたが、本人はそうした事実にもまるで無頓着だった。というか、自分が周囲の注目を集めていることに気づいてもいないようだった。そういうところ、ヘルムート様は昔からヘルムート様だなあと思う。

「ライラは魔法が使えるか？ 貴族だから使えるよな？ 魔法というのは面白いものだな！ 見てくれ、ちょっと考えてみたんだが……」

何度か言葉を交わし、顔見知りになった頃、ヘルムート様は興奮した様子でわたしに話しかけてきた。

ちようどその頃、微弱ながら魔力の発現があったらしく、ヘルムート様はすっかりその不思議の虜となっていた。

「ヘルムート、魔力があるの？ じゃあヘルムートも貴族なんじゃない？」

通常、平民は魔力を持たない。稀に魔力を持つ平民もいるが、それは母体が奇跡的に出産まで持ちこたえた、貴族の落し胤おぼであることがほとんどだ。魔力が発現したというのなら、教会の鑑定で魔力量の多さやその属性を測り、父親を特定することができる。

だがわたしの言葉に、ヘルムート様は唇を引き結んだ。

「……それはどうかな。侯爵家の人間が何度かここに来たが、俺みたいな娼婦の息子が侯爵家の血

を引いてるわけがない、って面と向かって言われたからな」

ヘルムート様は一瞬、暗い目つきになったが、すぐ頭を振って言った。

「そんなことより、なあ、これどう思う？ 俺の魔力量じゃ足りなくて、発動できないんだ。ライラならどうだ？ できないか？」

そう言うと、ヘルムート様は時折考え込み、唸りながら、一生懸命、空中に術式を描きはしめた。魔力が足りなくてところどころ黒ずんでいたが、それは明らかに炎の魔法の一種だった。

「え、ヘルムート、すごい！ 術式が描けるなんて！ 誰かに教えてもらったの？」
褒められて嬉しかったのか、ヘルムート様は赤くなってわたしから視線を逸らした。

「ん、んん……、いや、ずっと前だが、娼館うぢの客に魔法を使えるやつがいたんだ。そいつが一度、酔っぱらって魔法を使うところを見た。そいつは、こんな感じに魔力を使って式を描いてたんだ」
驚いたことに、ヘルムート様は一度魔法を見ただけで、そこから独自に術式を編み出していたのだ。それは基本を無視しているうえ、だいぶ非効率的な式ではあったが、何の知識もなく術式を編むこと自体、驚異的な才能だ。

王国屈指の実力を誇る塔の魔術師でさえ、新しい術式を編むことは難しい。それを、魔術はおろか基礎教育すらろくに受けたことのない、まだ子どももののヘルムート様がやってのけたのだ。

「……ヘルムート、魔術師になったら？」

ヘルムート様の才に驚いたわたしは、思わず口走っていた。

「魔術師？」

「そう。魔法を使って悪いやつを倒して、みんなを守る人。ほら、あの塔」



わたしは王宮を指さした。王宮の端っこに、天を衝くような鋭い塔がある。この国の者なら、誰でも知っている魔術師の塔だ。

「あそこに、魔術師がいっぱいいるよ！ みんな、すごい魔法が使えるんだって！」
「すごい魔法……」

ヘルムート様の目が輝いた。

「わたしの魔力属性は風と治癒だけで、炎はないから、この術式が使えるかどうかはわかんない。今度、術式の基本規格書を持ってくるね」

「ほんとか!？」

「うん、その代わり、わたしのドレス着てくれる？」

わたしの持ち出した交換条件に、ヘルムート様は顔を引きつらせた。

「おまえ、まだあきらめてなかったのか……」

「だって絶対似合うよ！」

わたしは、男だろうが女だろうが、似合うならドレスを着たっていいじゃない、と思っていた。

これはわたしの元々の性癖もあるが、貴族としては少し風変わりなベルチェリ家の教育方針が、わたしの考え方に影響を与えた部分も大きいと思う。

父は、わたしやリオンが幼い頃から、身分や人種、性別などにとらわれ、その本質を見誤ることのないよう、徹底した教育を施してくれた。それは商人としての心構えだったのだろうが、そのおかげでわたしは、ヘルムート様と親しくするのを咎められたことは一度もなかった。

そして何より、ヘルムート様は本当に可愛かった。可愛いもの、美しいものをさらに磨き上げ、

最高の仕上がりを愛でたい。子どもの頃、わたしはそんな風に考えていた。

「俺は男だぞ。なんでドレスなんか」

「そーいうの、固定かんねんって言うんだよ！ 女だからとか、男だからとか、そーいうのは商売のさまたげでしかないから、頭から捨てなさいって父上が言ってた！ それにほら、リオンだってドレス着てるじゃない！」

わたしは、娼館に面した大通りで、道行く人からお菓子を大量にもらっているリオンを指さした。まだ三つのリオンは、わたしの昔のドレスを着て、みんなに可愛い可愛いと褒められて、にこにこしている。後ろに立っている護衛も、心なしか自慢げだ。

「……………」

「妙なこだわりは捨てて、ドレスを着ようよ！ きつと楽しいよ！」

「こだわりとか、そういうんじゃない！」

わたしは何とかヘルムート様にドレスを着てもらおうと、粘り強く交渉を重ねた。

術式の基本規格書という賄賂が効いたのか、結果として一度だけ、ヘルムート様はわたしのドレスを着てくれた。

仏頂面で、「不本意！」と全身で叫んでいるような態度ではあったが、それでもとても可愛らしかった。

「ヘルムートは可愛いから、将来モテモテになるよ！」

「そ……、そうかな」

「きつと、王子様がいつぱい来て、ヘルムートに結婚してくださいって言うよ！」

「なんで王子限定!？」

「いいじゃない、ヘルムート結婚したいんでしょ？」

この頃からヘルムート様は「大きくなったら結婚して、幸せな家庭を築くんだ！」と事あるごとに宣言していた。

わたしからすれば結婚など、家のためにしなければならぬ義務くらいに感覚だったから、ヘルムート様の結婚にかける情熱は理解しがたいものだった。

「でも、なんでヘルムートは結婚したいの？」

「……結婚すれば家族ができる」

「かぞく……」

父も母も弟も、当たり前のようにわたしの側にいる。子どもだったわたしには、ヘルムート様の気持ちも理解できなかった。

「ライラにはわからないだろうな」

だが、寂しそうなヘルムート様の表情に、わたしは不躰な質問をしたことを、子どもながら悔やんだ。

「……ごめんね、ヘルムート。わたしのほうこそ、固定かんねんにとらわれてたね。気をつける」

「いや、おまえさつき、そういうのいろいろ飛びこえた発言してたから。これ以上、固定かんねんとかそういうの、飛びこえようとしなくていいから」

そんなやり取りも今は遠い昔。

まさかあの可愛らしいヘルムートが、幽鬼のような有様になり果て、結婚できない現状を呪う日

がやっつて来ようとは。

「ヨナスめ……、呪つてやる……」

血走った目でブツブツつぶやくヘルムート様に、わたしは肩をすくめた。

ヨナス様とヘルムート様は同い年だし、戦場で何度も一緒に戦った仲だというのに、恨み妬みがハンパない。

「もー、ヘルムート様、せっかくヨナス様を送ってくださいった招待状を燃やしちゃうなんて。……これ、婚約を祝う夜会の招待状ですよ？ これに出席なさらないと、ヨナス様から結婚式の招待状をいただけないかもしれませんよ」

「結婚式の招待状なんて、来たって出席しないからいい！」

結婚できない人間に結婚式の招待状を送るなど、万死に値する行為！ と主張するヘルムート様に、わたしは辛抱強く説明した。

「ヘルムート様、ご存じですか？ 結婚式って男女の出会いの場でもあるんですよ」

「……そ……、え？」

「考えてもみてください。招待状が送られる相手って、両家の知り合いや友達、お付き合いのある方々ですよ。つまり、だいたいが素性のちゃんとした方々です。そして出席者は、男女ともに、結婚適齢期の独身者がとても多いんです」

ヘルムート様が、黙って灰になった招待状を見つめた。

「ヘルムート様が結婚なさりたいのなら、結婚式はこれ以上ないチャンスなのに、それを潰すような真似をなさるなんて」

「大丈夫だ中身は覚えている！」

ヘルムート様が食い気味に答えた。しかし、すぐにしゅんと肩を落として言った。

「たしかに結婚式は、出会いの場かもしれないが……、私にとつては無意味だ。私は、これまで何度も同僚の結婚式に出席してきたが、何の出会いもなかった。今回も、どうせ同じだ……」

後ろ向きだなあ、という言葉をわたしは飲み込んだ。

ヘルムート様、自分でも言ってるように、お金はうなるほど持っているし、宮廷魔術師団長という地位もある。次男だから侯爵家は継げないが、やりようによっては三日で婚約者くらい見つければと思うんだけど……、うーん……。

「なんだライラ。何か言いたげだな？」

ヘルムート様が片眉を上げ、わたしを見た。

「うーん、いや、ヘルムート様、招待状をいただけるとして、ヨナス様の結婚式には、どういう格好で出席されるのかなーと思ひまして」

「魔術師団の正装で行くつもりだが？」

それがどうかしたか？ と聞くヘルムート様に、やつぱりかーとわたしは肩を落とした。

「……ヘルムート様、ひよっとして今まで出席された結婚式とか、ぜんぶ魔術師団の正装で行ってました？」

「そうだが。……何か問題でもあったか？」

ヘルムート様が少し不安そうな表情になった。

こういう表情をすると、ちよっと昔の面影が見えて可愛らしい。

しかし、ここはきちんと真実を伝えねば。

「ヘルムート様、魔術師団の正装って、全身黒一色ですよね」

「ああ、魔術師を象徴する色だしな」

汚れも目立たないからいいぞ、と嬉しそうなヘルムート様に、わたしは重々しく告げた。

「魔術師団の正装って、色も問題ですけど、作りもマズいんですよ」

「何が」

ヘルムート様、まったくわかってない。わたしはため息をついた。

「ヘルムート様、最近、夜会や舞踏会に出席されたことは？」

「ない」

キツパリ断言するヘルムート様に、わたしは顔をしかめた。

「なんですか。ヘルムート様、腐っても宮廷魔術師団長なんだから、夜会の招待状なんていくら

でも来るのでは？」

腐ってもってなんだ、と文句をつけつつ、ヘルムート様はもごもごと口ごもった。

「……私は、その……、社交は苦手なんだ」

うつむくヘルムート様に、そんなんでよく婚活しようと思ったな、とわたしは少し呆れてしまっ

た。

貴族の婚活なんて、社交と同義ではないのか。

しかしヘルムート様は、

「だってあいつら、怖いじゃないか……」

うつむいたまま小さく言った。

「あいつら、私を見てクスクス笑うし……。ダンスを申し込んでも断るし、聞こえよがしに悪口言うし……」

「……あいつらって、貴族令嬢のことですか？　ていうかヘルムート様、その貴族令嬢と結婚なさりたいんですよね？」

わたしは呆れた表情を隠すこともできなくなっていた。

あなた、一人で魔獣の集団をビシバシ倒しまくってる宮廷魔術師団長ですよ？　歴代最年少で魔術師としてトップの地位に上り詰めた、天才の誉れも高い御方ですよ？　それなのに、貴族令嬢に笑われるのが怖くて婚活できないって。冗談だと思いたい。

「貴族が駄目なら平民……、というわけにもいきませんしねえ」

「当たり前だ。罪もない平民を殺せるか」

ヘルムート様がぶすつとして言った。殺すというのは物騒だけど、あながち間違っではない。

ヘルムート様は魔力量が多すぎて、魔力量の少ない平民と長期間一緒にいると、相手の体に悪影響を与えてしまうのだ。もし平民の女性がヘルムート様の子どもを妊娠したとしても、出産までに母親か子どものどちらかが死んでしまうだろう。

「ヘルムート様、貴族令嬢だってヘルムート様と同じ人間です。きちんと礼儀を尽くして会話を交わせば……」

「ライラにはわからないんだ！」

わたしの言葉をさえぎり、ヘルムート様が泣きそうな表情で叫んだ。

「ライラは社交が得意だろう！ 初対面の相手とでもすぐ打ち解けて仲良くなってるが、私にとつてあれは神業だ！ あんなの私には無理だ！ 無理なんだ！」

「そうだ私に結婚なんて無理なんだあああ！ と絶叫するヘルムート様を、わたしはつくづくと眺めた。」

「うーん。これは、思った以上にこじらせている。」

「確かにこの状態だと、結婚までたどり着くのはなかなか難しいかもしれないなあ、とわたしは思ったのだった。」

「ヘルムート様、落ち着いてください」

「うおおおおお！ と荒ぶるヘルムート様に、わたしはびっと人差し指を立てて言った。」

「ヘルムート様の婚活について、わたしから提案があるのですが、聞いていただけますか」

「……提案？」

「ヘルムート様が、ぐりん、と首を曲げてわたしを見た。悪霊に憑依された人間みたいで、ちょっと怖いんですけど。」

「なんの提案だ。おまえの社交術を駆使して、私を結婚させてくれるとでも言うのか？」

「ふん、と拗ねたように鼻を鳴らすヘルムート様に、わたしは辛抱づよく言った。」

「ええ、そうですね。……ヘルムート様、わたしの言う通りになさってくださいれば、今から三か月後、ヘルムート様は婚約されているはずですよ」

「……え？」

「わたしの言う通りになさってくださいれば、ですよ。そうすれば、ヘルムート様は結婚できます」

「冗談……」「じゃないです」

わたしはヘルムート様の目をじっと見つめた。

「ヘルムート様は、ご自分の武器も弱点もご存じではない。だから婚活という戦場において、百戦百敗という惨状にあるのです」

「……百回も断られてない……」

抗議するようにヘルムート様がつぶやいたが、無視。

「いいですか、ヘルムート様」

わたしはちゅちゅと指を振りながら言った。

「貴族の……、いいえ、平民であっても同じことです。婚活とは、己の市場価値を知り、それを高め、より高い値をつけてくれる相手に売りつけること。つまり、商売と同じです」

「商売……」

乱暴な言い方だが、単に結婚するだけなら真実の愛など必要ない。もちろん愛ある結婚が理想だが、なくともどうにかなる。愛は結婚後、ゆっくり育めばよいのだ。

「ヘルムート様、わたしはベルチェリ家の長女として、様々な商品売り込む手管を父から叩き込まれました。どんなに市場価値が低く、誰も欲しがらないと思われるガラクタであっても、ベルチェリ商会の手にかかれば、それは黄金と同じ価値を持つ宝に生まれ変わるので」

「それって詐欺……」

「いいえ！」

わたしはキッとヘルムート様を睨みつけた。

「何をおっしゃいますか、ヘルムート様！ ベルチェリ商会は、顧客満足度が大変高いことで有名なんですよ！ 要は、何を人は欲しがるのか、どうすれば欲しがるようにできるのか、これを知ることが肝要なのです！ よいですか、ヘルムート様！」

わたしはビシッとヘルムート様に指を突き付けた。一介の事務官のわたしが魔術師団長に不敬極まりない態度だが、今のヘルムート様は完全にわたしの気迫に飲まれ、そんなこと気にもかけていない様子だ。

「ヘルムート様、率直にお答えください。……なぜ今まで、ご自分が結婚できなかったと思われませんか？」

「よくそんな残酷なこと聞けるな！」

ヘルムート様はわたしを睨み、泣きそうな顔で叫んだ。

「わっ、私が結婚できないのは……、で、できないのは……、ウ、ウウ……、みんなみんな滅びてしまえばいいんだあああああ！」

「落ち着いてくださいヘルムート様」

発作のように荒ぶりはじめたヘルムート様の背中を、わたしはバンバンと遠慮なく叩いた。

「こんなんでいちいち傷ついてたら、とても結婚なんてできませんよ」

「いた、痛い、もう叩くな！ おまえ力強くないかライラ！」

涙目でわたしを見るヘルムート様に、わたしはため息をついた。

「商会関係者には危険が付いて回ります。ましてわたしはベルチェリ商会トップの長女なんですよ。護身術の一つや二つ、使えないようでは困りますから」

「おまえ伯爵令嬢なのに、護身術つかえるのか……」

驚愕の眼差しを向けるヘルムート様に、わたしは淡々と告げた。

「わたしのことはいいんです。問題はヘルムート様ですよ。……ヘルムート様は次男ですから侯爵家は継げませんが、宮廷魔術師団長という地位をお持ちです。それを狙って婚姻のお話もあったかと思いますが、ヘルムート様、それぜんぶ断ってますよね？　なんでですか？」

ヘルムート様は有名人だし、わたしの所属する魔術師の塔の頂点に立つ方だ。その噂は聞きたくなくとも耳に入ってくる。そしてヘルムート様は、宮廷魔術師団長に就任した直後、降るよう持ち込まれた数々の縁談を、相手に会いもせずには断っていると評判だった。正直、そのせいでヘルムート様に回ってくる縁談が皆無になったといっている。

何故そんな愚行を犯したのか、そこら辺をまず、把握しなければ。

「……私が結婚したいのは、家庭を持ちたいからなんだ……」

蚊の鳴くような声でヘルムート様が答えた。

まあ、そりゃそうだとわたしは思った。

家を継ぐ必要のない次男以下が婚活するって、出世の足がかりのためか家庭を持つためだろう。既に宮廷魔術師団長という魔術師としてトップの地位に上り詰めたヘルムート様が、これ以上の出世を望むとも思えないし。

「……私は家庭を持ちたいのであって、名ばかりの結びつきを求めているのではないのだ……」

悲しそうに言うヘルムート様。

「そう言えばヘルムート様、子どもの頃から結婚願望強かったですもんね。大きくなったら幸せな

家庭を築くんだ！　っていつも言っていましたねえ」

子どもの頃、商談を終えた父は馬車に乗らず、事務所に面した通りを歩いてわたしとリオンを迎えに来てくれた。それをヘルムート様は、いつもじっと見つめていた。大きくなってから思い返すと、それはとても羨ましそうな、寂しそうな表情だった。

生い立ちから言っても、ヘルムート様が温かな家庭に憧れを持つ気持ちはよくわかる。

「……だが、私にまわってくる縁談は、いつもいつも『夫婦が顔を合わせる機会は年三回まで』とか、『互いに干渉せず、それぞれの恋人については不問とする』とか、そんなのばかり条件にいつてくるんだ……」

「……………」

まあそういう婚姻も、貴族間ならよくある話なんだけど。

だけど、そうか、それは確かに、温かい家庭を夢見るヘルムート様には、受け入れがたい話だろうなあ。

「わかりました」

わたしは重々しく頷いた。

「ヘルムート様、確認させていただきます。……ヘルムート様は、心から想いあう相手と結ばれ、温かく笑いの絶えない幸せな家庭を築きたい。……それで間違いないですね？」

「間違いない！　……が、無理だろそんなの」

いじけるヘルムート様に、わたしは力強く言った。

「いいえ、ベルチェリ商会に不可能はございません！　わたしの言う通りにしてくだされば、先ほ

ど申し上げました通り、必ず三か月以内にヘルムート様は婚約されていますよ！」

「……いったい何が条件だ？」

ヘルムート様は探るような目でわたしを見た。

「いやですわヘルムート様、幼なじみの幸せのためにお力添えをすると申し上げておりますのに」「それだけではなからう」

ヘルムート様は仏頂面で言った。

「おまえが入団してからというもの、魔術師団からベルチェリ商会への注文度合いは、飛躍的に増えている。今や我が魔術師団が購入する物品の半分は、ベルチェリ商会を経由したものだ」

「ご注文いただいた品すべてにおいて、非常に高いご満足をいただいているものと自負しております」

「……これ以上、何が望みだ。魔術師団を乗っ取りたいのか？ それとも宮廷を？」

「何ということをおっしゃるのです」

ヘルムート様の言葉に、わたしは目を吊り上げた。

「いくら何でもそれは言いすぎですわ。商いは、商売相手あつてこそです。商売相手に乗っ取つて、それで何かベルチェリ商会に利するところがありますか？ 太く長いお付き合い、それこそがベルチェリ商会の望むものです。商売相手の安定した経済状況、ひいてはお幸せな環境こそ、ベルチェリ商会を更なる発展へと導くのです。敵対や乗っ取りなど、求めておりません」

ベルチェリ商会は平和主義なのだ。金儲けできれば何でもいいという、死の商人と一緒にしないでいただきたい。

ふんつと鼻息荒くわたしがそう訴えると、懐疑的な表情ながら、ヘルムート様はそれ以上の追及はやめてくれた。

「……まあいいだろう。おまえの目的はわからんが、確かにベルチェリ商会はこれまで商売相手と問題を起こしたことはないからな」

「おわかりいただけましたか」

「いや。……私が結婚できたとして、それがどうしてベルチェリ商会の利益につながるのか、さっぱりわからん」

わたしはヘルムート様に囁んで含めるように言った。

「ヘルムート様、貴族同士の結婚にどれほどお金が動くか、ご存じないのですか。ましてやヘルムート様は、宮廷魔術師団長にしてマクシリティ侯爵家ご次男という尊いご身分。さらにはご自身でもおっしゃっていた通り、ヘルムート様は貴族の中でもかなりの財力を誇っておられます。……そのようなお方のご結婚を取り仕切らせていただいたとなれば、どれほどの利益がベルチェリ商会にもたらされるか、おわかりになりますでしょう」

「ふむ……」

ヘルムート様は顎に指をあて、考え込んだ。

「私の結婚にまつわる用意すべてを、ベルチェリ商会に一任すればよいのか？　そうすれば、私の願いを叶える」と

「ご理解いただきまして幸いにございます」

深々と頭を下げると、わかった、とヘルムート様の声が聞こえた。

「いいだろう、私の結婚に必要なものは、すべてベルチェリ商会に一任する。……その代わり」
「ええ、お任せください。必ずやヘルムート様のお望みを叶えて差し上げます。三か月、それだけ
いただければ、ヘルムート様は愛しい婚約者様をその手にお抱きになっていらっしゃいますわ」
「三か月……」

本当か、と小さくヘルムート様がつぶやいた。

「ヘルムート様は、ご自分をおわかりではないんですわ」

わたしは少し笑って言った。

ヘルムート様は魔術の天才だが、ちょっと世情に疎すぎるうえ、自分を客観視できていない。

「話し方や見た目、振る舞いを少し変えるだけで、ヘルムート様、きっとモテモテになりますよ！」

なんと言っても顔はいいですしね！ とあえて砕けた口調で言うと、ヘルムート様は毒気を抜かれたような、脱力したような表情でわたしを見た。

「……昔、同じようなことを言っていたな。私が、か……、可愛いから、将来モテるだろう、と」

「ヘルムート様、覚えていらしたんですか」

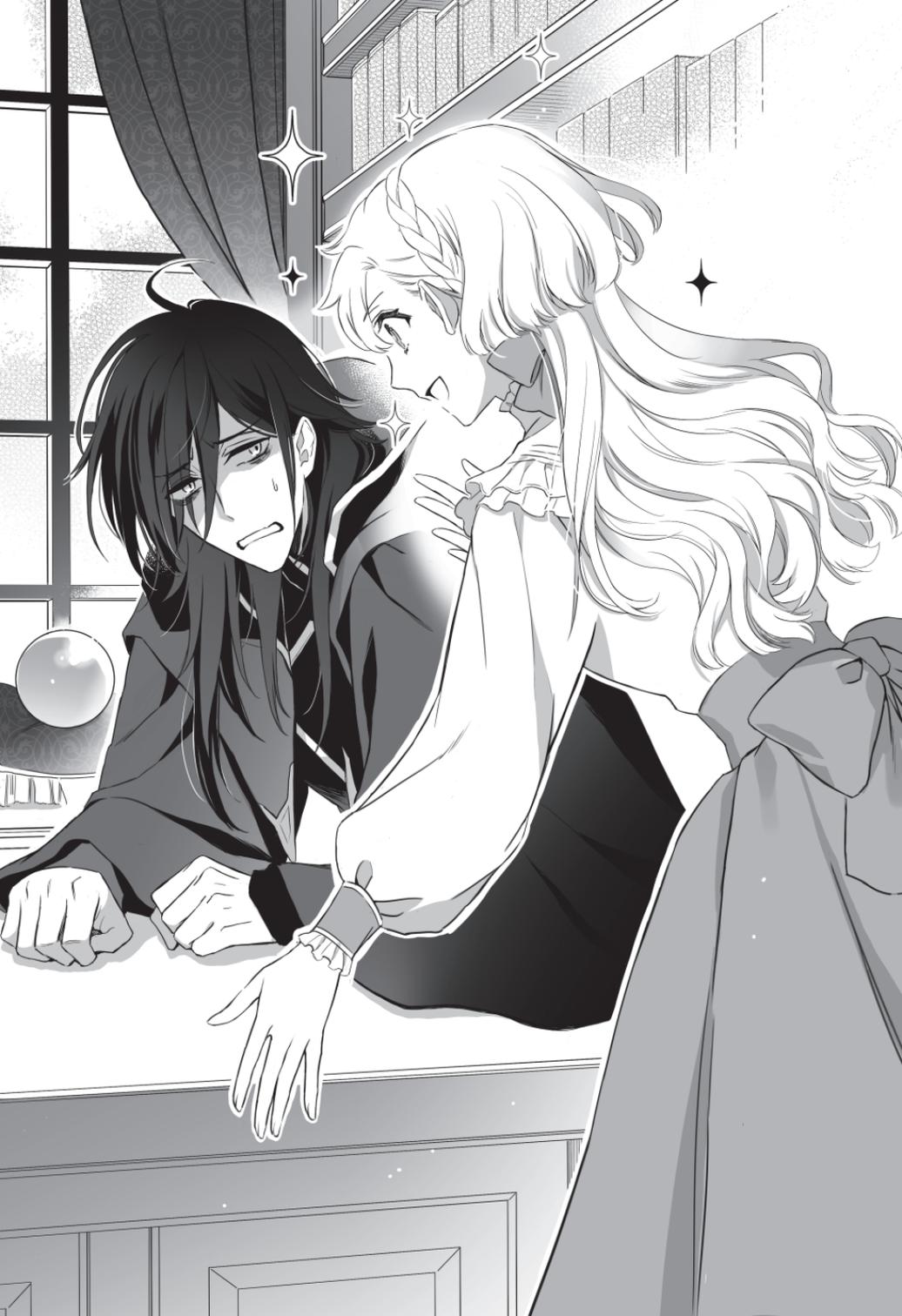
少し赤くなつてうつむくヘルムート様に、わたしは微笑みかけた。

「わたしは間違ったことは申しません。ヘルムート様は、きっとモテモテになりますわ！ そして
想い想われたお相手と、幸せな家庭を築かれるのです！ すべてこの、ライラ・ベルチェリにお任
せください！」

わかった、とヘルムート様は頷き、そして小さく「なんだか悪魔と契約したような気がするな

……」とつぶやいた。

失礼な！ 皆さまを支え見守る一生のお友達、というのがベルチエリ商会のモットーなんです
よ！



「ヘルムート、今年の新人はどうだ。見どころのありそうなやつはいるか？」

魔術師団長が入団リスト片手に、難しい顔つきで私に尋ねた。

「さあ？ 去年よりはマシであることを祈るしかありませんね」

肩をすくめる私に、魔術師団長が入団リストを投げて寄こした。

「来年からは、ヘルムート、おまえが塔を統べる魔術師団長になるのだ。こいつらはおまえの命令に従い、手足となつて働く部下となる。祈るだけでは足りんぞ。……まあ確かに去年のアレは、例外だがな」

ため息をつく魔術師団長に、私も苦い気持ちになる。

去年の入団員は、ひどいものだった。何をとち狂つたのか、魔力量が平均以下のコネ入団が半数を占めていたのだ。

貴族が魔術師団の中に派閥を作ろうとしたためだろうと魔術師団長は言っていたが、バカバカしい。そんな理由で塔に入ったところで、ついてゆけるはずがないのに。

実際、そいつらは入団後、半年もしない内に次々と塔を去っていった。その後、一部の貴族から塔への風当たりがキツくなつたが、知つたことか。派閥を作りたいなら勝手に作ればよい。ただ塔に入るなら、それに見合つた実力をつけてからにするべきだ。

私は、受け取つた入団リストにざっと目を走らせた。

去年で懲りたのか、今年の入団員はみな、学院の卒業試験で魔法実技、魔法理論、共にA評価以上を取っている。まあ、これは当然だな。他に何か使えそうな小技を持っているやつは……、と思ったところで、一人の名前に目が止まった。

ライラ・ベルチェリ。

「まさか」

思わずもれた言葉に、魔術師団長がリストを覗き込んだ。

「なんだ？ ああ、ベルチェリ家の娘か。恐らく商会のつなぎとして寄越したんだろうな。まあ、こいつは去年の阿呆どもとは違って魔力もあるし、実技、学科とも他の入団員と比べて遜色ない成績を修めている。問題なからう」

「……………」

ライラが、魔術師の塔に入る。

そう思うと胸がざわめいて、言葉が出てこなかった。

ライラ・ベルチェリ。私の幼なじみ……、と言っているのだろう。ここ何年も会ってはいないし、向こうはもう、私のことなど忘れているかもしれないが。

子どもの頃、私とライラは親しかった、……たぶん。他に友達と呼べる相手などいないからわからないが、少なくとも、私にとってライラは特別だった。

ライラは明るく優しい少女で、まだ侯爵家に引き取られる前の私にも、気さくに話しかけてくれた。私の初めて描いたつたない術式を、すごい、と大げさなくらい褒めてくれたこともある。

誰かに褒められたのは、記憶にある限り、あれが初めてだったように思う。あの日は嬉しくて眠

れなかった。正直、私はあの一件で、魔術師を目指そうと思ったほどだ。

だが、成長するにつれ、私はライラと自分の間にある、埋めがたい溝に気づかされた。

ライラは私を、すごい、と褒めてくれたが、本当にすごいのはライラのほうだった。

ライラの対人スキルは、半端ない。初対面の相手であっても、あつという間に相手の懐の内に入り込み、仲良くなってしまう。

考えてみれば、私と初めて会った時もそうだった。

ライラは、まるでお姫様のような格好をした、それは可愛らしい女の子だった。実際、ライラは伯爵令嬢であったわけだが、それにもかかわらず、娼婦や私のようなはみ出し者にも警戒心を抱かずに、親しく言葉を交わす術を心得ていた。

子どもの頃は何も思わず、素直にライラと一緒にいることを楽しんでた。だが、侯爵家に引き取られ、しばらく経って、気がついた。

ライラの周りには、いつでも人がいる。

だが私には、誰もいない。

ライラにはたくさんの友人や知り合いがいて、みながライラと言葉を交わし、一緒にいることを望んでいる。対して私には、共に過ごすことを望んでくれる者など一人もいない。血の繋がった家族でさえ、それは同じだった。いや、もっと酷かったかもしれない。

『おまえの魔力は、たしかにマクシリテイ侯爵家由来のものだ。そう教会が判定を下したから、おまえを引き取ることにした。……が、勘違いはするな。おまえはマクシリテイ侯爵家の人間ではない。身の程をわきまえ、邪魔にならぬよう、大人しくしている』

マクシリテイ侯爵家に引き取られたその日、血の繋がった祖父にかけられた、初めての言葉がそれだった。父は祖父の後ろに立っていたが、私とは目も合わせず、何の言葉もなかった。兄も同様で、私の存在などなかったことにしたいと思っているのが、ひしひしと伝わってきた。

わかっていたことだが、改めて思い知らされた。

私に家族はいない。私を望んでくれる者など、誰もいない。

ライラは、私とは正反対の存在だ。家族がいて、人気者で、誰とでも仲良くなれる。私は、他人どころか血の繋がった家族からさえ忌み嫌われるような存在だ。ライラは本心では、そんな私をどう思っているのだろう。疎ましいとまでは思わぬまでも、積極的に関わりを持ちたいとは思っていないのではないか。

ライラと自分の違いにうすうす気づきながらも、私はしばらくの間、ライラから離れる決心がつかず、未練がましく何度もベルチェリ家を訪れていた。

そもそも引きこもり気質の私が、気軽にベルチェリ家を訪問できたのは、ベルチェリ家当主ゲオルグ殿の厚意によるところが大きい。

ベルチェリ家の当主、ゲオルグ殿は、私が教会の魔力鑑定を受けた後、裏から手を回して教会側に働きかけてくれた。ゲオルグ殿の尽力により、教会はマクシリテイ侯爵家に圧力をかけ、私は侯爵家に引き取られることとなった。おかげで、私は国立魔術学院に入学し、教育を受けることができたのだ。

教会関係者からその事実を教えてもらった時、私は驚くとともに怪訝に思った。いったい、なぜゲオルグ殿が私にそこまで肩入れしてくれるのか、理由がわからなかったからだ。

私が侯爵家に引き取られる前、ゲオルグ殿とは二言三言、言葉を交わすこともあったが、ただそれだけだ。君がヘルムートか、ライラヤリオンと遊んでくれてありがとう、とか何とか言われ、私もただ、ああ、とか、うん、とか返事をしたにすぎない。ゲオルグ殿は商会の事務所帰りにライラとりオンを迎えに来るだけで、とくに私に興味を持った様子もなかった。それなのに、なぜ？

答えのわからぬ問題を、抱え込んで黙っているのは性に合わない。不躰だと怒られても、疑問を解消してスッキリしたい。

侯爵家に引き取られた後、私はゲオルグ殿に直接、疑問をぶつけてみた。するとゲオルグ殿は、特に怒った様子もなく、あっさり答えてくれた。

「先行投資です、ヘルムート殿。あなたはきっと将来、魔術師として大成されるでしょうからな」つまり、私の才能を見込んで後ろ盾になってくれたということか。

だが、魔術師の塔に入れば、特定の貴族に肩入れはできなくなる。それこそ宰相レベルの王国統治権を目指しているというならまた話は変わってくるが、家格からいってベルチェリ家にそれは無理だろう。

もしくは、私がベルチェリ家お抱えの魔術師となることを期待されているのだろうか。大商人のお抱えともなれば生活は安定するだろうが、それでは研究の範囲が狭まるし、使える魔術も限られるだろう。できればお抱え魔術師の線は避けたいのだが……。

困惑する私に、ゲオルグ殿は慌てたように言った。

「いえ、ただベルチェリ家は、ヘルムート殿と良好な関係を築きたいと考えているだけです。ヘルムート殿が魔術師の塔に入りたいと希望されていることもわかっております。……そのほうが、

いろいろと楽しみですしね。そう遠くない未来、ヘルムート殿は魔術師たちを統べるお立場になれるでしょうから」

まだ学生の身である私に、ずいぶんと過分な褒め言葉だ。が、悪い気はしない。ライラもそうだが、その父親だけあってゲオルグ殿は、他人の警戒心を解くのが得意なようだ。

「マクシリテイ侯爵家では、何かと息の詰まることもあるでしょう。……よろしければいつでも我が家にいらしてください。ベルチェリ家はいつでも、ヘルムート殿を歓迎いたしますぞ」

ゲオルグ殿は、私が侯爵家に引き取られた後、どう扱われているのかも、だいたい察していたようだ。その推察通り、私は血の繋がった家族から冷遇され、苦しんでいた。家族を欲していた私にとって、マクシリテイ侯爵家の仕打ちは随分と応えるものだった。

私はゲオルグ殿の言葉に甘え、たびたびベルチェリ家を訪れるようになった。ベルチェリ家は、とても居心地がよかった。私の夢見る家庭が、そのまま目の前にあるような気がしたものだ。頼もしい父、優しい母、仲の良い姉弟。……なぜ私は手に入れることができなかったのだろう。いや、それはただの運だとわかっている。だが、もしかしたら、私にも何か悪いところがあったのかも知れない。それが何かわからないから、だから私は、血の繋がった家族に愛されないのではないかと？ 私は、いつだって一人だった。私と一緒にいたいと望む者など、誰もいなかったからだ。

そのことに気づくと、怖くなった。

血の繋がった家族でさえ、私を疎んじているのに、私に対して何の義理もないライラが、どうしていつまでも私に好意的でいてくれるだろうか。ましてや私には、魔術以外に誇れるものなど何もない。ライラを楽しませるような貴族らしい軽妙な会話も苦手だし、無駄が嫌いなので結論を先に

言って相手を怒らせることもしばしばだ。

私を見るライラの瞳に、祖父と同じ侮蔑の色が浮かぶことを想像しただけで、胸が痛くなった。いつか失ってしまうのなら、今の内に自分から手放すほうがマシかもしれない。

私は、逃げるようにベルチェリ家から遠ざかり、代わりに魔法理論や魔道具開発にのめり込むようになった。

念願叶って塔の魔術師となつてからは、毎日がとても気楽だった。周囲は私と同じような、魔法にしか興味がない者ばかりだから、気を遣う必要もない。魔術師団長にも目をかけてもらい、次期団長に、と推薦を受けるまでになった。

魔術師として確固たる地位を築いた私は、もう祖父や父、兄などへ愛情を求めることをあきらめていた。血筋にこだわる輩は、どれだけ努力しようとして私を認めようとはしないだろう。こだわるだけ時間の無駄だ。それより魔法の研究をしているほうが、よっぽど有意義だし楽しい。

そう自分に言い聞かせ、私は胸の痛みに気づかぬふりをした。

そんな毎日の中、私は時折、娯館にいた頃のことを思い出すことがあった。

あの頃の私は、ライラとリオンの来訪を、何よりも楽しみにしていた。父親に連れられて帰っていく二人を見送るたびに、どうしようもない寂しさを感じ、いつか自分も幸せな家庭を持ちたい、と強く願ったものだ。

そして今、夢だった魔術師にはなれたが、いまだ私は一人だ。

……ライラの目に、今の私はどう映るだろうか。

今さら別に、ライラにどう思われようとかまわない。そう思うものの、なんとなく私はソワソワ

ではないがね」

フフ、フフ、と抑えきれない笑みを浮かべる魔術師団長に、私は冷めた視線を向けた。ちよつと褒められただけでそのザマはなんだ。我が師匠ながら、チョロすぎないか。

「ヘルムート様も、お久しぶりです」

すると、ライラがにっこりと、あの輝くような笑顔を私に向けた。どうして良いかわからず、私はただ黙って頷いた。

「ヘルムート様のご活躍は、学院でも有名でした。なんでも山岳地方への出征中に、魔道具を開発されたとか」

「ん……、暇だったからな。手慰みに作ってみただけだ」

ウソだ。あの遠征は強行軍で、ぜんっぜん暇なんかなかった。だが、どいつもこいつも寒い寒いとうるさいから、仕方なく徹夜して暖房魔道具を作ったのだ。急いで作り上げたから、満足のいく出来ではない。魔力循環回路の効率がイマイチで……。

「いいえ、ヘルムート様の魔道具のおかげで、それ以降、何千人もの兵士が凍死をまぬがれたと伺いました。素晴らしい発明ですわ」

「ん、んん……、そうか？」

「ええ、さすがヘルムート様です！」

ライラがにこつとして私を見た。おかしい。ライラが笑うたび、なんかキラキラするのはなんでだ。ライラの魔法属性は風と治癒で、光魔法は使えないはずなのに。

「ん……、だがあれはまだ、完成品ではないのだ。時間がないので、試作品のまま商品化させたの

だが」

「たしかに魔力循環回路などは、改善の余地があるかもしれませんがね」

「その通りだ！」

ライラも気づいていたのか。私は頷き、暖房魔道具の問題点とその改善策について、一気にまくし立てた。

「あれは複数の魔法を組み合わせるから、魔力の循環が肝要なのだが、その効率に問題がある。いや、魔道具の大きさを変える必要はない、持ち運びが不便になれば本末転倒だからな。要は、術式の簡略化をすればいいのだが……」

ライラがじっと私を見つめ、真剣な様子で私の言葉に耳を傾けている。それが嬉しくて、私は一生懸命、説明した。隣で魔術師団長が「我が弟子ながら、チョロすぎる……」とつぶやいたのが聞こえたが、何を言うか、言いがかりも甚だしい。

私は別に、ライラに褒められたからって喜んでるわけではない！ 魔道具の改善は必要なことだから、仕方なく説明してやっているだけなんだからな！

その後、ライラは塔の公文書管理課に配属された。ここは魔力より他機関との交渉力があるのを言う部署だ。ライラの能力を考えれば、妥当な配属先といえるだろう。

……が、やはりちょっと心配だ。たしかにライラは誰とでもすぐ仲良くなれるし、コミュニケーション能力においては私など足元にも及ばぬ天才だ。しかし、相手が血の気の多い第二騎士団の連中だったりする場合、少しマズいのではないだろうか。

ヨナスが直接統括している第一騎士団に比べ、基本的に第二騎士団は荒っぽいやつらが多い。王宮直属である分、地方の騎士よりはだいたいマシだが、それでも伯爵令嬢であるライラにしてみると勝手が違って戸惑うこともあるのではないだろうか。

それに、ライラはあんなに可愛くてキラキラしているのだし……。もし第二騎士団の阿呆が、ライラに何かちよっかいでも出したらどうする。大変ではないか！

たしか今、第二騎士団から返答待ちの案件があったはずだ。その確認も兼ねて、ライラの様子を見に行ってみるか。

返答待ちの案件は、低強度国境紛争における作戦要綱についての提案だが、そもそもなぜ全騎士団バラバラに返書を寄こすのだ。おかげで一向に要綱がまとまらないではないか！ だいたい、低強度国境紛争における塔の役割はトラップ一択で、主役は騎士団だというのに、要綱のまとめ役を塔に丸投げするのはどうなんだ。いくら書類仕事が嫌いだからといって、何でもかんでも塔に押し付けるその姿勢、許しがたい。ヨナスめ、一度締めてやる！

私がライラしながら公文書管理課に足を運ぶと、

「まあ、それではこのような魔術をほどこして各課に文書を届けるのですね、素晴らしい工夫ですわ」

ライラの鈴を転がすような声が聞こえた。

いつも思うが、ライラの声にはそれ自体、魔力があるのではないかと思う。あの声を聞くと、なんでも言いなりになってしまいうさだ。

さて、戦場でライラはうまくやれているのだろうか。……ここで私が姿を現しては、面倒なこと

になるかもしれない。余計な仕事を押し付けられたくはないし、姿を隠しておくか。

私は自身に隠蔽術をかけ、しばし様子を見ることにした。

「いや、別にそんな褒められるようなものでは……、ツフ」

「いえ、こうして文書に魔術を乗せ、相手方が手に取った時、それとわかるようにこちらに合図がくるのでしょうか？ 大変素晴らしいアイデアですわ。おかげで、先方が文書を確認したかどうか、塔にいながらにしてわかるのですもの」

「フ、いやあ……、そ、それと、この文書には、他にもいくつか魔術をかけているんですよ。なに、どれも簡単な魔術ですがね。相手が文書を手にとった瞬間、その文書の内容の要約と回答期限を相手に通知するというもので……」

ライラに褒められて気を良くしたのか、ライラの隣に立っている魔術師が、立て板に水のように説明をはじめた。

……あいつは三年前に入塔した魔術師だな。魔力はそれほどでもないが、複合魔術の小技が得意だったはずだ。ふん。

「ただ、この通知魔術は、なぜか不評で……。以前、騎士団から怒鳴り込まれたこともあるんですよね」

ふう、とため息をつく魔術師に、ライラが首を傾げた。

「まあ、なぜですか？ こんなに有用な魔術なのに。……あの、ちなみにどのような通知文を魔術に乗せたのか、聞かせていただけますか？」

ライラの言葉に、ええもちろん！ とその魔術師は意気込み、机に積まれた書類の山から文書を

一枚、手に取って開いた。それを合図に、魔術音声が始まる。

『第二騎士団に告ぐ。この文書は低強度国境紛争の作戦要綱について、各部署の回答を求めるものである。ちなみに回答期限はとつくの昔に過ぎている。とつとと回答文を寄せ。散発的なゲリラ戦における第二騎士団の体たらくは目を覆わんばかりだが、それを改善する有効な提案を出すよう、希望する。以上だ』

文書に乗せられた魔術音声聞き終え、私は頷いた。ふむ、過不足なく必要事項を伝えているようだな。問題ない。

と、私は思ったのだが、ライラは困ったような表情をしている。

「……ライラ殿、なにか問題でも？」

魔術師が不安そうな表情でライラに問いかけた。

「あ、いいえ。……ええと、必要な情報を簡潔にお知らせする、良い通知文だと思いますわ。ただ……、そのう、簡潔な分、貴族の皆さまには馴染みがなく、直截的な表現が反発を招いてしまう恐れがあるかと」

「なるほど。……しかし、婉曲な表現にしようとしたこともあるのですが、その時は何を言っているのかわからん、とやはりお叱りを受けまして……」

「まあ、そうですね」

ライラは、その魔術師にニコツと笑いかけた。まぶしい笑みに、魔術師の頬が赤くなる。貴様！ 仕事になにをデレデレしておるのか！ 燃やしてやろうか、おおん！

「よろしければ、各部署宛での通知文は、わたくしにお任せいただけませんか？」

「ライラ殿に？」

「ええ」

戸惑ったような表情の魔術師に、ライラは優しく言った。

「わたくしは、ベルチェリ商会で父の補佐を務めた経験があります。商談をまとめる際の、ちょっとしたコツというか、まあ、大したことではないのですが、工夫をしてみたいと思ったのです。

……この魔術は、本当に優れたものでもの、わたくしにも是非、お手伝いさせていただきたいんです」

「そ、そうですか？ フ、フフ……、まあ、うん、ライラ殿がそこまで言うなら、うん、仕方ないですね。特別に手伝わせてあげましょう」

グフグフと縮まりのない笑みを浮かべる魔術師に、ありがとうございます、光栄ですわ、とライラはやはり、にこにこしながら続けて言った。

「国境付近では、いまだ散発的な戦闘が続いているんですね。……国境の紛争地帯へ、ベルチェリ商会が新しく開発した救急キットを、無償で提供させていただきたいと思っておりますが、よろしいでしょうか？ 何か問題ありませんでしょうか」

「え？ ああ……、そうですね、治癒術師の負担を減らせるなら、特に問題ないと思いますよ。魔術科連隊長の承認が得られれば、転移陣ですぐ送付できますし。私から上に話しておきましょうか？ そうすればすぐ、各隊長へも話が通るでしょう」

「まあ！ 本当ですか？ ありがとうございます、助かりますわ！」

「いや、なに、これくらいなことありませんから。……それより無償で提供って、それで大丈夫

夫なんですか？　うちは忖度なんてしませんから、無償と言われたら、ほんとにタダでもらっちゃいますよ」

「ええ、もちろん。……実際にお使いいただき、気に入っていただければ、次はちゃんとお金を払って購入してくださいさるはずですよ。ベルチェリ商会の取り扱う品は、どこよりも品質が優れていますもの」

へえ、そんなもんですかね、と魔術師は感心したようにライラの話聞いてる。

……なんだかあの魔術師、ライラの手で転がされてるような気がするんだが。

しかし、工夫と言ったが、ライラはあの通知文のどこをどのように変えるつもりなのだろう。別に変える必要などないように思えるが。

まあ、いいだろう。ここはライラのお手並み拝見といくか。もし第二騎士団から何か言われたら、その時は私が守ってやれば済む話だしな。

私は踵を返し、執務室に戻った。その後、なんだかんだと忙しく、ライラの様子を見に行くこともできずにいたのだが、

「おう、ヘルムート、ここにいたのか。さつき、第二騎士団から例の案件の返書もらったぞ」
魔術師団長ヒューゴ様が、鼻歌を歌いながら執務室に入ってきた。

ヒューゴ様は現在、魔術師団長としての権限をほぼすべて私に移譲しており、今ではもっぱら新人の訓練などを引き受けてくださっている。ご本人は楽しそうだが、新人はヒューゴ様を見かけただけで光の速さで逃げ出すようになってしまった。

しかし、第二騎士団からの返書というと……。

「低強度国境紛争のアレですか？」

「そうだ。先ほど、第二騎士団の副団長から、直々に手渡されたぞ。珍しく上機嫌な様子だったな。塔の魔術師もようやく礼儀を身につけたようだなとか、いろいろ言っていたが、賄賂でも贈ったのか？」

「……いえ。ただ、公文書管理課のほうで、通達に変更を加えたようです」

ふーん、とヒューゴ様は第二騎士団からの返書を開き、それを一瞥した。

「相変わらず汚い字だな、まったく。筆圧が強すぎて紙が破れそうになってるんだが。……まあ、ともあれこれで、ようやく要綱を取りまとめられるな、ヘルムート」

「ええ……」

何かと魔術師の塔と衝突の多い、あの血の多い第二騎士団がすんなり返書を寄こしたただけでも驚きだが、しかもその上、魔術師を褒めるような発言があったとは。

いったいライラは、どんな魔法を使ったんだ？

私は第二騎士団からの返書を手を、しばし考え込んだ。

……子どもの頃から、ずっと感じていたことだが、世の中というものは、どれほど魔力が強くとも、どれほど剣技が優れているよりも、それだけではどうにもならぬ。現に私は今、次期宮廷魔術師団長として魔術師の塔の頂点に立っているが、それでも無力感に苛まれることばかりだ。

対してライラは、いともあっさり第二騎士団に返書を作成させた。騎士団との関係を悪化させず、塔の魔術師を敵視するあの脳筋連中から、褒め言葉さえ引き出してみせた。そんな芸当、私ではおそらく、やつらに賄賂を贈ったところで無理だろう。

ライラと私と、いったい、何が違うのだろう。いや、何もかもが違うのだろうが、努力ではどうにもならぬ、大きな壁のようなものを感じずにはいられない。

『ヘルムート、すごい！ 術式が描けるなんて！』

無邪気に私を褒めてくれたあの時のライラを、今ではとても遠くに感じる。

私は、すごくなんでない。どれだけ強力な魔法が使えても、宮廷魔術師団長になっても、それだけではダメなのだ。

子どもの頃から結局、私は少しも変われなかった。誰にも愛されない、あの頃のまま、ずっと立ち止まっているのだ。



なんか、ヘルムート様がうなだれている。

わたしはちよつと心配になった。

これからもつとグサグサ言わなきゃいけないんだけど、大丈夫だろうか。

「まずはヘルムート様の生活環境を改善しなければなりません」

わたしは、ボサボサの黒髪が目の下に紫色のクマのあるヘルムート様に、キツパリと告げた。

「毎日八時間、睡眠をとっていただきます。魔獣に襲われて逃げているとかでない限り、必ず毎日、八時間の睡眠を確保してください」

「八時間？ 無理……」なら結婚も無理です」